ベトナム・ハノイから見た日本―28 歳女性の場合

③日本の飽和市場とは違うチャンスの場所

ハノイに来て、就いた仕事は日系損保会社の営業の仕事です。損害保険、つまり火災保険や運送保険、労災や医療、工事・・・と多彩な保険を、主に日系企業向けに売り、アフターケアをする仕事です。基本的には企業向け。2011 年は、ベトナムにとって最大の「投資元」となった日本の企業が、どのように仕事をしているのかを紹介します。今、中国で話題の共産党によるメディア検閲について、ベトナムの事情もお伝えします。

■広大な平野、散らばる工業団地

ハノイは、紅（ホン）河という中国から流れる大河を中心にできた、広大な平野に栄えた町です。町から山は全く見えません。ハノイ進出の企業の多くは製造業ですが、工場はハノイから車で 30 分から 1 時間半かかるような郊外の、工業団地に構えるのが一般的。工業団地も、利便性やランクはピンキリですが、「日系工業団地」と呼ばれる日本の企業が開発した団地は人気です。

ベトナムでは、1990 年代に造成した野村証券によるノムラハイフォン工業団地、住友商事が大規模に造成したタンロン工業団地などが有名。このほか、シンガポール系のＶＳＩＰにも日系企業が多く入居しています。入居企業でつくる社長会があって、見えにくい政府の動きや労働者のストの臭い（？）などについて情報交換をするんだとか。工業団地内には、だいたい和食屋があります。

■日本の「飽和市場」とは違う営業環境

工業団地へ向かう車での長い移動時間、いわゆる「駐在員」の同僚と話していて一番印象的だったのは、「日本の保険市場は飽和状態。保険を掛けていない企業はないし、工場新設もほとんどない。新規でこんなに営業案件があるのはすごく面白い」という、日本との違い。営業目標は「どれだけ他社から切り替えられるか」というところに集中する消耗戦。ハノイには毎日のように、新しい日本からの進出企業情報があり、ハノイに居を構えている 3 社で争奪戦です。

仕事を覚え、たくさんのチャンスが降ってくる場所。東南アジアで働き始めるというのは、日本の若い人にとってさほど悪くない選択肢だと思います。

一方、工業団地で工場長などを務めるおじさん方は、疲れた表情の人も多い。ベトナム（特に北部）ではエンターテイメントが少ない。おじさん方はもっぱら休みの日をゴルフにあて、日本人交流を深めています。ベトナムに限った話ではないかもしれませんが。

（郊外の工場へ続く道@休日に乗ったバイクからの風景）

■ベトナムの新聞事情、共産党の検閲

さて、ビジネスでも日常生活でも、ひっそりとしっかりと影響を及ぼしているのが共産党政治です。ビジネスでは、主に企業進出の許認可などで不透明さがあり、手続きも遅い。そして、フリーペーパーなど広告事業者や、新聞社など、マスコミ関係の仕事をする企業にとって大きな足かせとなっているのが検閲です。

最近、中国の「南方週末」という新聞社が共産党に対し、検閲行為への抗議としてストライキやデモをして、世界の注目を集めています。ベトナムでも、それがたとえ日本語媒体であったとしても共産党の厳しいチェックがあります。ある雑誌記者の人によると、「貧しくてかわいそうな雰囲気の子どもの写真を載せようとして、指導された」とのこと。私自身は、英字の Vietnam News という新聞を取っていましたが、一面は毎日、首相の発言や視察の様子。批判記事はほとんどなく、なんとも読む気が起らない新聞でした。

ちなみに、Facebook も原則禁止、のようです。というのも、アクセス制限があまりにも簡単にすり抜けられるものであるため、若い人はみな夢中。仕事中もチェックしている人も多いです。新聞がつまらないから、プライベートなコミュニティーばかりが関心ごとになってしまう。そんな因果関係をぼんやりと考えたりしました。（続く）